

---

# サモンナイト3 ~不幸で馬鹿な男~

浮根

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サモンナイト3 不幸で馬鹿な男

### 【Nコード】

N0591BA

### 【作者名】

浮根

### 【あらすじ】

ある時男は死んでしまった。そして神に転生させられる。そして不幸なのか落下している。なぜ…。そんな始まりです。

注意：サモンナイト3をやった事がありますが、クリアまでしなかったので、また最初からプレイしながら書いていきたいと思うので更新が遅くなると思いますが最後まで書こうと思うので最後まで読んでください。

あと文才がありません。だから駄文になるかもしれませんが、温かい目で見守ってください。

あと設定がチートになったりキャラ崩壊があるかもしれないのでそれが許せないと言う人はバグをしてください。それではよろしく  
お願いいたします。

## プロローグ：転生する事になった（前書き）

あけましておめでとつじぎになります。

暇があれば是非読んでください。

## プロローグ：転生する事になった

その者は空っぽだった。最初は親の言うことを聞く人形だった。そして現実を見て親に逆らい、そのせいで親からは酷い仕打ちを受けた。周りからは化け物を見るような目で見られてきた。そんな人生だった。

そしてその者は死んでしまった。そして、気がつくとも周りは真っ白だった。

「?????」ここは何処だ？」

辺りを見ても何もなかった。

「?????」どうしよう?早く家に帰らないと何を言われるか解らないぞ。どうしよう?」(・・;)」

焦っている時に何か不思議な気配がした。

「?????」(なんだろう?不思議な気配が此方に向かって近づいて来ているな。)まあ待っていれば分かるか。」

そして暫く待っていると、知らないじいさんが現れた。

「丁度いいと思う……」

「???」おい、そのじいさん、此所は何処だ？」

じいさん? 「此所は天界で儂は神じゃ。」

……は? ……このじいさん何言ってるの? ヤバい、とんでもないじいさんに声を掛けてしまったのかも。…まあ悔いてもじゃあない…

??? 「いい病院に連れて行ってやるから、自称神様、取り敢えず家に帰る方法を知っていたら、教えてくれ。」

神様? 「何でそうなるんじゃ! いきなり! 儂はいたって正常じゃ! たわけ!」

やっぱり年か。可哀想に。

神様? 「何でそんな哀れむような目で見てくるんじゃ! ?いきなり失礼であろうが! ?」

??? 「すまなかつたな。何か明らかに胡散臭かったので…ついな。

」

仕方ないだろうが。いきなり神様だ…何て言われたら、誰だって俺みたいになるだろうよ。

神様？「まあ仕方ないか。…それより大事な話がある。心して聞くのじゃぞ。」

なんだろう？何かとてつもなく嫌な予感がする。

神様？「すまなかった。…僕のミスでお主を殺してしまった。…本当にすまなかった。その代わりお主をそのまま他の世界に転生させてやる。喜べ。それと此方で勝手に転生の時に貰える特典を決めたからの。此でそちらに拒否権はなくなったからの。」

何かムカつくな！まあいいか。それよりも…

???「まあいい。それよりも俺が転生する場所は何処だ。」

神様？「それはまだ決めてないから、この中から選んでくれ。」

そして三枚の紙を渡された。

1：サモンナイト3

2：サモンナイト3

3：サモンナイト3

「……おい。」

神様？「なんじゃ？」

「……」舐めてんのかじいさん。

殺気を此れでもかというぐらい出した。

神様？「何がじゃ？」（何という殺気じゃ！？震えが止まん！見栄を張るのが精一杯じゃ。）

「……」まあいい。ここでいい。それと今さっき言ってた特典が何なのか教えてくれ。」

神様？「分かったのじゃ。転生した時に、一緒に教えてやるう。」

「……」分かった。それじゃあそろそろ、その転生ってのをやって

くれ。」

神様？「分かったのじゃ。っと、その前にお主の名前は何と言つたのじゃ？」

「???」忘れてた。∴俺の名は天牙てんが 彩さいだ。じゃあな。」

神様？「ああ。頑張つてこい。」

彩「∴ああ。行ってくる。」

するとその言葉が合図だったかのように彩はその場から消えた。

神様？「間張るのじゃぞ、天牙 彩。」

何かを祈るように神様は言った。

こうして天牙 彩の物語の扉が開かれていった。



**プロローグ：転生する事になった（後書き）**

どうでしたか？

至らない部分はドシドシ言ってください。

それでは次回〓オリキャラ設定です。

それではまたお会いしましょう。

## オリキャラ設定(前書き)

今回はキャラ設定なので短いです。多分能力はこれ以上増やさないと思います。それではどうぞ。

## オリキャラ設定

天牙てんが 彩さい

性別：男性

年齢：17歳

容姿：顔は上の中ぐらいで周りからは余りモテない。そして黒髪で少し長いがくくっていない。黒眼。

好きな事：寝る事、読書、面白い事

嫌いな事：面倒臭い事、不幸な事、闘う事、ふざけた野郎

性格：普段は優しく馬鹿で不幸だが、何故か闘いになると非道になつて容赦がない。だから周りからは化け物扱い等をされやすい。本

人は馴れてしまい何とも思っていない。

能力：身体能力向上

不老不死で誰か一人と契りを交わすと相手も不老不死になる。

無限の貯蔵庫（形は小さい物入れ。本人しか使えず他の者が使ってもただの袋で意味がない。使用すると何でも武器が出で来る。）

破壊の魔眼、その名を壊眼かいがんという。能力はあらゆる物を破壊できる。ただ使用した夜にかなりの激痛に襲われる。

武器：殆ど拳等で闘ったりするが、使う武器は一応ダガーと銃だ。

第一話：始まりは空から落ちてくる（本当に不思議だね。）（前書き）

結構作るの難しいです。

駄文になっているかもしれないませんがよかったですら読んでいてください。

第一話：始まりは空から落ちてくる（本当に不思議だね。）

彩side

目が覚めると空から落ちていた。そうかそうか、落ちているのか。  
仕方ないな。……………んなわけねえだろうが……………  
……………！！！！！！！！

彩「とにかく…あの糞爺の神様…覚えていろよ……………！！  
絶対に殺してやるからな……………！！」

ヤバいもう地面が近い。あ……………空が速いなあ……………。  
逃避は此処までにして、どうしよう？（…）（…）

そんな事を考えていると…

ドツカ……………ン！！！！

痛つつつて……………！！！！

何これ…凄く痛いんだけど。そんな事を考えていると…

??? 「其処の人大丈夫ですか!？」

そんな声が聞こえてきた。んなわけないだろう普通は…と声の聞こえた方を見ると…女性が何か知らないのと闘っていた。  
…何この状況は？

彩 side out

??? side

私の名前はアティといいます。今非常に不味い状況です。私の生徒のアーゼとベルフラウが凶暴なはぐれ召喚獣に襲われていました。

でも今の私は武器も召喚石も持っていません。いえ、持っていません。でも、助けてみせます。

アティ「必ず守ってみせます!？」

武器なら…ある…

・・・え？

我を喚べ・・・我を、召喚せよ・・・

生き延びるための力を欲するならば

何この声…頭の中に直接響いてくる！？

我を抜き放て！！

とにかく、今はこの声に賭けるしかないわよね！？

アティ「ハアアアア！？」

すると碧色に輝く剣が私の右手にありました。

アティ「(うそ！？私の手に、剣が！？)」

はぐれ召喚獣「ウ、ウウウ・・・」

アティ「（力が・・・伝わってくる・・・この剣なら・・・）勝てます！」

とってはぐれ召喚獣に向かって攻撃をしようとするところ……ピュ・

……

？何か上から聞こえたので不思議に思い上を見て見ると……何か上から降ってきていました。何あれ？

よく見ると人でした。……え？何で人が空から落ちてきているの？……ってそんな場合じゃないわ！助けないと！

ドツカ……ン!!!!!!

…あ、しまった！？大変！？とにかく…

アティ「其処の人大丈夫ですか!？」

そう言って暫くして穴の中から男の人が出て来ました…血だらけで

……

アティ「だ、大丈夫ですか!？」

すると男の人は

彩「このくらいの傷、何ともない。」

と言って辺りを見ていました。…って

アティ「何ともないわけないでしょ！？傷を見せてm

」

彩「敵がいるのに余所見をするな。」

と言われた瞬間

ドコッ      バコッ      バキッ

音がした場所に振り向くと…はぐれ召喚獣が無惨に殺された死体がありました。

あるはぐれ召喚獣はお腹に風穴が開いていたり、またあるはぐれ召喚獣は頭が無くなっていたりしていました。…え？どうなっているの？まさかこの男の人がやったのかと思い、その男の人の両手を見て見ると…

アテイ「!？」

その男の人の両手には血が付いていました。

私の生徒達も来て驚いていたり、倒れそうになっていたりしました。

彩「おい。どうかしたか？」

声を掛けられました。

アテイ side out

彩 side

何でずっと黙っているんだ?とにかく…

彩「おい。どうかしたか？」

暫くして…

アテイ「どうしてこんな酷い事をしたの!?!」

うお!?!何でいきなり怒られなきゃならないんだ？

彩「何をそんなに怒っている。」

アテイ「本当に解らないの?」

何か無茶苦茶怖いんですけど。なぜ?解らんな。

彩「ああ、全く解らんな。」

言った瞬間

パァー…ン!!

え？何で叩かれたんだ？

アテイ「どうしてそうやって殺せるの！どうしてそうやって平気な顔がしてられるの！何も思わないの！親からそういうこと習わなかったの！ねえ、答えてよ！」

最後には涙を出していた。

彩「親から唯一教えて貰えた事は…殺し方だけだ。」

何故だろうな。胸の内に閉まっていたものが全部出てきそうだ。

アテイ・生徒全員「え？どういうこと？」

彩「言ったままだ。俺の日常は人を殺す事だったんだよ。…此でいいか？」

全員が一時停止していた。

そして最初に口を開いたのは…

アテイ「そんな生き方で…いいの？苦しくないの？」

彩「いくら嘆いたところで何も変わらないんだよ。それとも何か…  
今まで殺して来た奴等に…もう殺したくないからもう誰も殺しませ  
んって…言えって言うのかよ！言えるわけないだろうがそんな事！  
もう堕ちるところまで堕ちたんだよ！俺は！」

糞「何でこんな事言ってしまったのだろうか。」

彩 side out

アテイ side

彩「いくら嘆いたところで何も変わらないんだよ。それとも何か…  
今まで殺して来た奴等に…もう殺したくないからもう誰も殺しませ  
んって…言えって言うのかよ！言えるわけないだろうがそんな事！  
もう堕ちるところまで堕ちたんだよ！俺は！」

アティ「そんな事ない！悪いと思える心があるのなら、まだやり直せるよ！」

私はそう信じています。でも何故だろう？この男の人をほっとけないのよね？何ていうのかな？私の直感でこの男の人は優しい人だと思ふのよね？

その理由は、彼の顔をよく見ると、とても苦しそうな、そんな顔をしていたから、こんなに必死になっているのかな？  
そんな事を考えていると…

彩「無理に決まっているだろうが！」

無理じゃない…だって

アティ「だって貴方泣いているもの。」

彩「え？…何で今さら涙なんて…クソ、止まらない。」

泣いている男の人をそっと抱きしめました。

アティ「泣いていいのよ。全部私が受け止めてあげるから…今は思う存分泣きなさい。」

と優しく微笑みかけた

彩「お言葉に、甘え、ます。…う、うう、うわああああん…  
…。」

今まで我慢していたのが一気に出て来ているようだった。

「あれから暫くたって」

彩「すいません、お恥ずかしいところを見せてしまって。」

アティ「いいの、気にしないで。ところで名前を言って無かったわよね。私の名前はアティ。元は軍人だったけど今は辞めてこの子達の家庭教師をしているの。」

彩「そうなんですか？意外だな。人は見掛けによらないものなんだな。俺の名前は天牙 彩と言います。」

意外って何よ！意外って。

アティ「それは失礼だと思えますよ、天牙さん。」

彩「彩でいい。」

アテイ「え？」

彩「だから彩って呼べって言うているんだ。それと敬語、お互いなしな。わかったな。」

アテイ「うん、わかった、彩」

あ！忘れるところだった！

アテイ「彩、今後一切殺しはやつたらいけないからね。約束よ！」

彩「…善処する。」

アテイ「いいわね」

彩「わかった。(怖)」

よしこれで彩の方はいいわね。あとは…

アティ「アリーゼ、ベルフラワー、大丈夫？」

アリーゼ・ベルフラワー「先生…うわああああん。」

ただこの子供が泣くのを受け止める事しか今の私には出来なかった。

アティ side out

「夜会話」

アティに叱られてもう人等を殺さなくてすむようになった。

正直、アティみたいに想いをぶつけてくる人が今までいなかったから、何かスッキリした。

そして思った。アティはこれから先何があっても守ろうと、今日誓った。

そして暫く浜辺で座っていると…

アティ「どうしたの？こんなところで？」

と言いながら俺の隣に座った。

彩「星は綺麗だなっと思って見ていたんだ。俺の住んでいたところでは、こんなに綺麗な星は見れないからな。」

そうこんな汚れた俺には勿体無いくらいだ。

アティ「どうしたの、彩？何だか寂しそうな顔をしてるよ？」

心配そうにアティが俺を覗いてくる。

彩「イヤ…何でもない。」

アティ「そ、そういえば彩の故郷って何処なの？」

彩「此処じゃない場所…要するに異世界から来たんだ…多分。」

アティ「い、異世界！？それってまさか、彩ってはぐれ召喚獣なの！」

彩「そのはぐれ召喚獣って何？」

アテイ「はぐれ召喚獣っていうのは、召喚師が召喚獣を召喚して送還をする前に何らかの原因で死んでしまつか、捨てられた者の事をいうの。」

へえ〜そうなんだ。待てよ…てこてはつまり…

彩「俺がそのはぐれ召喚獣ってのならもう元いた場所には帰れない…という事が。」

まいつか！

アテイ「うん…そうだけど…何か嬉しそうだね？」

彩「あつたぼつよ！もう親の命令で人を殺さなくていいんだからな！」

アテイ「え！？親の命令で彩は人を殺してたの！？」

彩「あれ〜？言ってなかったっけ？」

アテイ「初耳だよ!？」

ヤベ…何かマズツたかも(・|・;)」

彩「じゃあすまんかった。ところで異世界は何個あるんだ？あと今さっきの事はいつか必ず詳しく教えるから今は待ってくれ。…頼む。」

アテイ「わかったわ…絶対にいつか教えてね。」

彩「ああ…わかっている。ありがとう。」

アテイ「なんでお礼なんて言つものよ。」

彩「何となくだ。」

アテイ「変な彩。」

彩「そうかもな。」

彩「……プ」

アテイ「……クス」

お互いに何故か笑い合った。

アテイ「そういえば、異世界が何個あるか聞いてきましたよね？」

彩「ああ、そうだったな。…で何個あるんだ？」

アテイ「5個あります。名前は機界・ロレイラル、鬼妖界・シルターン、霊界・サプレス、幻獣界・メイトルパ、最後に名も無き世界の5つです。恐らく彩はシルターンか名も無き世界から来たんだと思います。」

まあシルターンはないな。だって鬼妖界だから鬼や妖怪何かが出てくると思うし…そうだったのは伝承とかでしか知らないし。ということは…

彩「わかった、ありがとう。」

アティ「どういたしまして。…ところで彩はシルターンと名も無き世界のどちらから来たんだろう。うん。」

彩「多分だけど名も無き世界から来たんだと思う。理由はシルターンみたいに鬼等がでないから。」

アティ「そうなんですか？ところで名も無き世界ってどんなところなんですか？」

首を傾げながら言われた。ちょっと可愛いと思ってしまった。

彩「も、もう夜遅いから寝よう！そうしよう！そんじゃおやすみ！」

アティ「は、はい。おやすみなさい。」

そう言って急いでアティの元から離れていった。…クソ、何か調子狂うな。

こうして天牙 彩の物語は序章を迎えていった。そして天牙 彩とアティの出会いで運命の歯車は動き出していった。

UJU<

第一話・始まりは空から落ちてくる（本当に不思議だね。）（後書き）

どうでしたか？

意見があればドシドシ書いてください。

ではまた次回お会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0591ba/>

---

サモンナイト3 ~不幸で馬鹿な男~

2012年1月2日07時45分発行